

隋代の龍門石窟

小山 満

1. はじめに

隋代の龍門石窟をみると、造像活動を跡付ける紀年銘は、開皇15年(595)の賓陽洞外北側にある裴慈明の裴龕銘記と、大業12年(616)の賓陽中洞外北側にある李子贊の観音像龕、そして同年の賓陽南洞内にある梁佩仁の釈迦二菩薩造像銘記のわずか3点である。

そのため、この時代の龍門はあまり造窟されなかったと理解されている。しかし、他の石窟、たとえば敦煌莫高窟では、全492窟のうち100窟が、隋代の修造・重修窟である²⁾。隋代が37年間という短期間であることからみて、この造仏事業は決して少ない数ではないと思う。

また『隋書』『弁正論』等の記載からみると、初代文帝楊堅と二代煬帝楊広の崇仏政策は、異常なほど巨大である。大略次のように記している。

開皇元年(581)、高祖普く天下に詔して、出家を任聽し、仍りて計口出錢せしめ、経像を造営す。……(『隋書』卷35)³⁾

開皇3年(583)詔して曰く、朕聖教を欽崇し、神宇に念存す。それ周朝に廢せし寺ごとく修復すべし。……開皇の始めより仁寿

の末に終るまで、度せし僧尼二十三万人、海内の諸寺三千七百九十二所、凡そ経論を写せし四十六藏、一十三万二千八十六卷、修治せし故経三千八百五十三部、金銅・檀香・夾紵・牙石の像等を造りし大小一十万六千五百八十軀、修治せし故像一百五十万八千九百四十許軀、……

隋煬帝嗣ぐ。……修治せし故像一十万一千軀、鑄刻せし新像三千八百五十軀、度せし僧尼一万六千二百人。……(『弁正論』)⁴⁾

もしこれらの記載に意味があり、龍門石窟が何らかの関係をもつとすれば、それは、この文中の、文帝楊堅の修治した故像が150万余軀、煬帝の場合が10万余軀とある記述に関連する、主として故像の修治の問題であろうと思われる。したがって、はたして龍門には、それを実証する証拠があるか否か、他の石窟とのバランスからみて、どのようななるかを検討してみることにしよう。

2. 古陽洞の題字と文様

龍門石窟では、古陽洞が最も古い。最古の造像記事は太和17年(493)、新城県功曹孫秋生等二百人による造龕である。その後30年近くにわたり、洞内に数多くの北魏時代の銘



図1.孫秋生等造像記 北魏
 奥に「古陽洞」の題字が刻まれていることによる。しかし『魏書』の熙平2年(517) 靈太后が伊闕

文を残している(図1)。書道で龍門二十品とよばれる造像記は、その代表である。

この古陽洞は、洞内右壁

の石窟寺へ行幸したとある記事から、当時は石窟寺とよばれていたことが知られる⁹⁾。

古陽洞を“古の洛陽の石窟洞”の略称とすると、おそらく開鑿時の呼び名ではなく、その後の時代に名付けられたとみるのが自然であるが、いつ名付けられたか明らかではない。

題字の書風をみると、北魏初期の硬い楷書と違って、隋唐風の軟らかい楷書である(図2)。たとえば、上記孫秋生等の造像記や、牛厥造像記と、洛陽出土の安善夫妻墓誌(709年、図3)や隋智永の千字文などと比較すれば、一目瞭然である。

つぎに、題字の背景をみると、中央に水瓶から立ち上がる蓮華があり、左右からこれに向かう供養者の群像が4段に分かれて立っている。最上段に従者を連れた皇帝(右)、皇后



図2.古陽洞の題字と背景

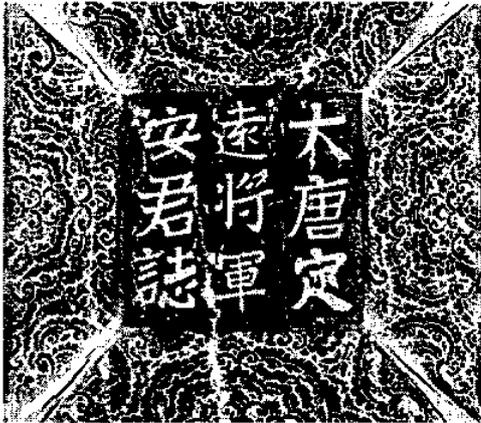


図3. 安菩夫妻墓誌 唐



図4. 古陽洞北壁Ⅲ層Ⅰ龕の龕楣

(左)。中2段は持華供養の従者達，下段は供物を捧げた従者と持華供養の従者達である。

描かれた蓮華の模様でみると、題字の古字右上の蓮華は、題字右隣の北壁第3層第1龕の龕楣に描かれた蓮華とほとんど同じである。また、この龕内左上の三葉の蓮華を持つ天人は、題字の従者と同類である(図4、5)。とすると、題字の作成と右隣の仏龕浮彫は、同一時期の可能性をもつことが考えられる。

題字の背景のテーマである皇帝礼仏図は、ここ龍門の賓陽洞と、鞏県石窟第4龕にあり、前者は、『魏書釈老志』にいう、宣武帝が高祖文昭皇太后の追福のために営んだ靈巖寺、すなわち賓陽洞であり、景明元年(500)に始められ、正光4年(523)に成ったものである(図6)。⁸⁾ 後者は、時期不詳であるが、この賓陽洞に

範を取り、作られたとされているので、6世紀中葉以降であろう。

中央の蓮華をテーマとする作例を見てみると、たとえば敦煌では280窟、292窟、305窟、417窟などにあり、北魏よりむしろ隋代に作例が多い(図7)。⁸⁾

蓮華を手を持つ一般的な持華供養者の場合



図5. 書き起こし部分図 (左図4、右図2)

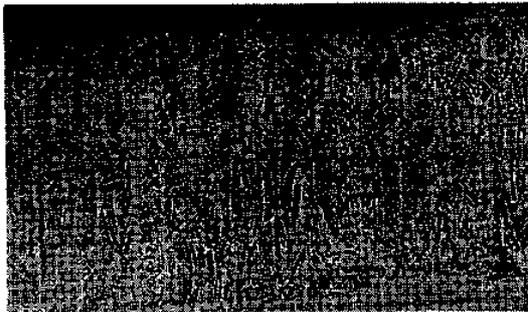
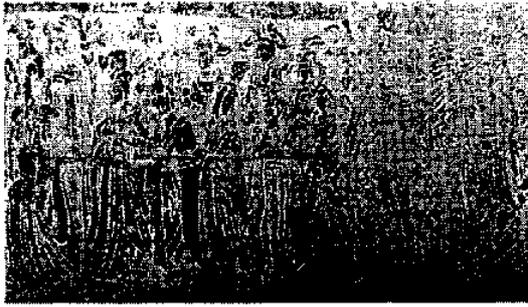


図6. 皇帝皇后礼仏図（寶陽洞）

でも、隋代に及ぶ作例の多いことが知られる。敦煌の62窟、281窟、295窟、303窟、304窟、390窟、394窟、427窟などは、いずれも隋代の持華供養者を描いている(図8)。

したがって、古陽洞の題字とその背景の図柄は、いずれも隋代にまで及ぶとみなければならぬ。

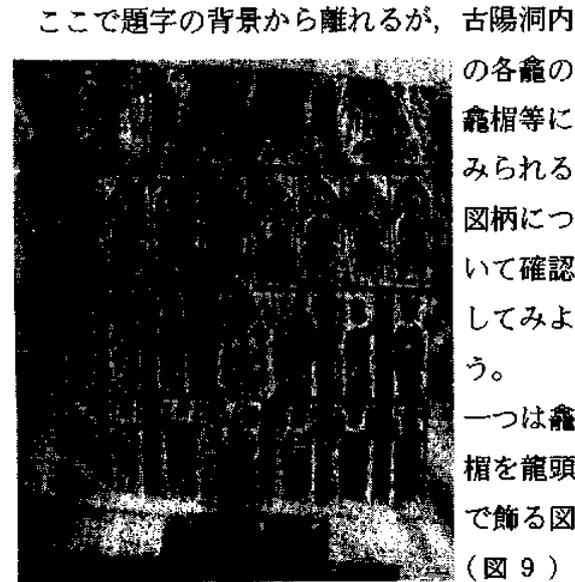


図7. 蓮華供花（隋開皇9年）

ここで題字の背景から離れるが、古陽洞内の各龕の龕楣等に見られる図柄について確認してみよう。一つは龕楣を龍頭で飾る図(図9)

や、豪華

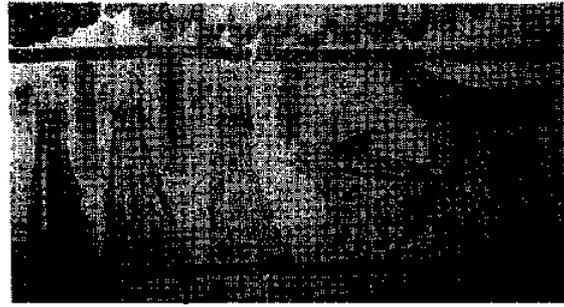


図8. 持華供養者像（敦煌第62窟, 隋）

な華網を天人が吊り下げる図(図10)、あるいは連珠文で縁を飾る図(図4)などがある。これらはいずれも隋代に及ぶ作例として他の石窟で見出すことができる。たとえば、龕楣に龍頭をつける例は、敦煌で303窟、304窟、419窟、423窟、427窟にみられ、華網を天人が吊り下げる例は、洛陽の水泉石窟(図14)にあり、連珠文の例は、敦煌の277窟、282



図9. 龍頭飾り龕楣（古陽洞）



図10. 華網飾り龕楣(古陽洞)

窟, 380窟, 390窟, 397窟, 401窟, 404窟, 420窟などにある。

二つには、維摩と文殊の対問を示す図(図1

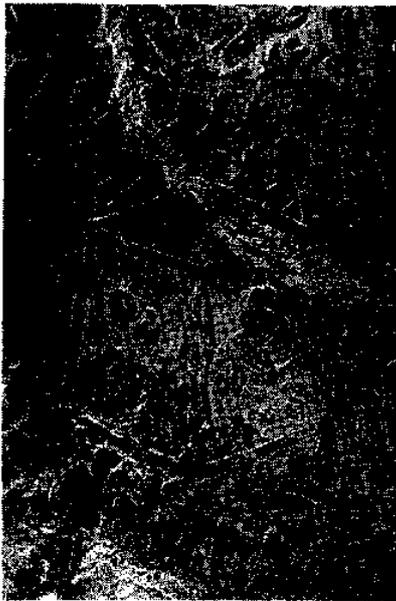


図11. 維摩文殊対問図(古陽洞)

1) で、敦煌では276窟, 314窟, 380窟, 420窟など、やはり隋窟で見出すことができ、これも隋代に及ぶことが知られる。したがって、古陽洞内の他の仏龕浮

彫も、元来は造像銘記で示される北魏時代の開窟であるとしても、古陽洞の題字とその背景と同様、その重修時期は、隋代まで及ぶと見なければならない。

3. 歩歩生蓮図

古陽洞南壁の列龕第2層に、釈迦多宝二仏並坐の仏龕がある。この龕楣に釈迦仏伝図が描かれている。太子の誕生から成道までを、左右双方から中央に向けて、左に乗象入胎、游园、樹下誕生、歩歩生蓮、九龍灌頂を描き、右に報喜、阿私陀占相、立為太子、山林之思、遣散仆馬、苦修成道を描いている。ここでは、歩歩生蓮図(図12)について考察してみよう。

仏伝故事を記す漢訳仏典は、①後漢・竺大力・康孟詳訳『修行本起経上』②劉宋・求那跋陀訳『過去現在因果経』③隋・闍那崛多訳『仏本行集経』④唐・地婆訶羅訳『方广大莊嚴経』等がある。しかし、この中で、歩歩生蓮のテーマは、①、②には記されず、

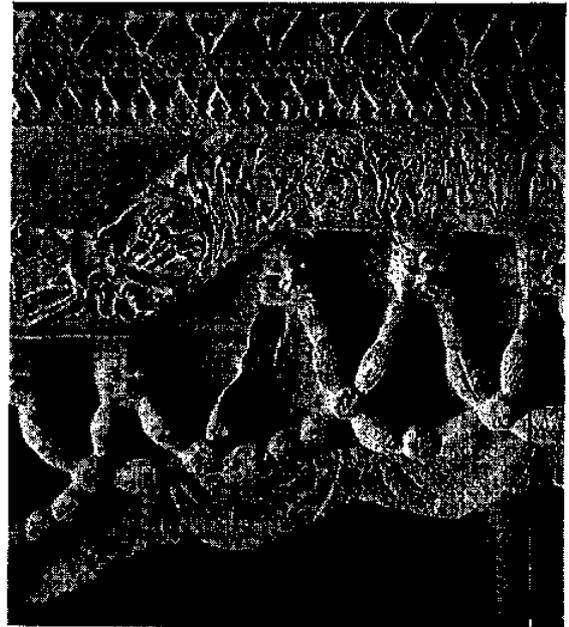


図12. 釈迦仏伝図(古陽洞)

③,④に記されている。たとえば③の『仏本行集経』では、つぎのようにある。¹¹⁾

菩薩生まれおわり、人扶持することなく、即四方へ行き、面して各七歩、歩歩足を挙げれば、大蓮華を出す。……我まさに成仏すべし、即ち地に立ち人扶持するなし、即七歩を歩き、足の履まれるところ、みな蓮華を生ず。(巻8)と。

すると、これは、蓮華に象徴的な意義を強めた段階で、歩歩生蓮が付加されたと考えることができる。

この、蓮華に象徴的な意義を強めたと思われる最もポピュラーな經典は、蓮華を題目として掲げる『法華経』が、やはり第一であろうか。たとえば、つぎのようにある。¹²⁾

若し人、散乱の心に、ないし一華をもって、画像に供養せし、漸く無数の仏を見たてまつりき。(方便品第二)

十小劫を満てて仏を供養す、ないし滅度まで、つねにこの華を雨しき。(化城喻品第七)

この時に諸仏、各宝樹の下にましまして、獅子座に坐し、皆侍者を遣わして、釈迦牟尼仏を問訊したもう、おのおの宝華をもち、もろてに満てて、之に告げて言わく、……(見宝塔品第十一)

法を恭敬するが故に、諸々の妙華を持って空中に住立して、行持法の者を讃歎し恭敬せん。(普賢経)

上記の『普賢経』は『法華経』の結経として天台大師智顛により包摂されたものである。実際彼は隋代で初代文帝楊堅、二代煬帝から篤く尊崇されていたことが知られている。¹³⁾

さて、歩歩生蓮図を遺物から探ると、私見では、東魏武定4年(546)造の釈迦玉石像光

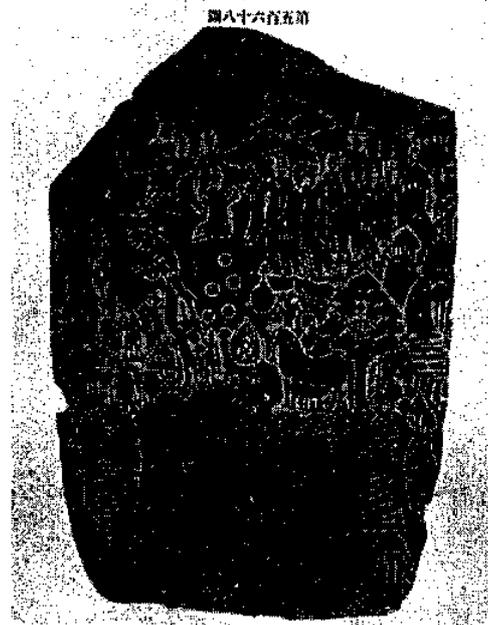


図13. 歩歩生蓮図(東魏)

背に浮彫されたもの(図13)と、北齊天保10年(559)の龍樹思惟像台座正面の作例を早期のものとして見出す。¹⁵⁾しかしこれに遡る北魏の作例は、現在のところ見出しえない。

したがって“歩歩生蓮図”は、遺物の上で東魏、北齊を上限とし、經典の上で隋代を上限とすることから、仏伝故事として北魏に遡ることの難しい図像の一つであるということができよう。

4. 洛陽水泉石窟と河南王寺

1990年に調査の公表された、洛陽市北郊の水泉石窟は、残存する摩崖碑文から、北魏太和十□年(495まで)の開鑿であることが知られる。¹⁶⁾この仏龕が、古陽洞に酷似していることに一驚するが、北魏の石窟として、両者が時代を同じくすることからいえば、その類似性は当然であろう(図14)。

しかし、碑文には補刻部分がある。報告で

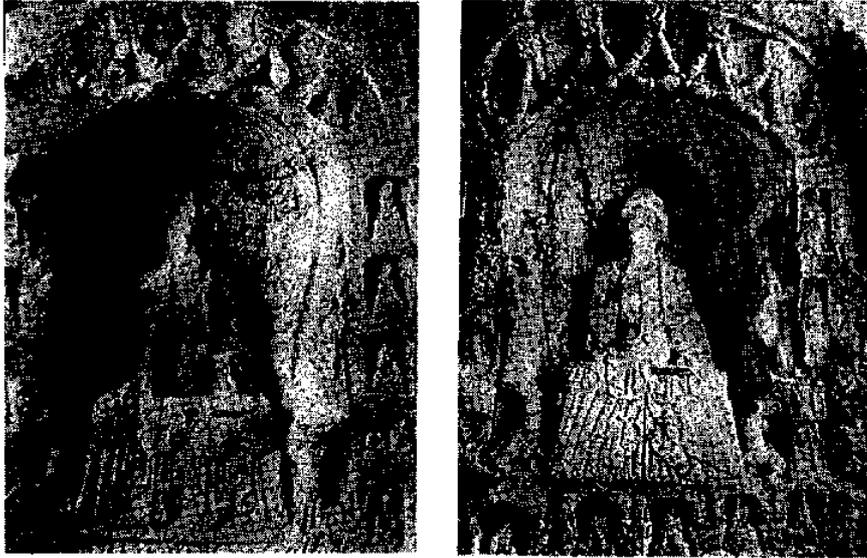


図14.水泉石窟仏龕(左北外壁4龕,右南壁3龕)

は、正文完成後ほどなくして補刻されたとするが、如何であろうか。補刻部分は、洛州河南王寺〜、と書き始められている。そこで、これを検討してみよう。

正史を調べると、河南王には、(1)北魏河南王曜、(2)北齐河南王孝瑜、(3)隋河南王昭の3人を見出すことができる。

はじめの北魏の(1)河南王曜は、北魏道武帝の息子7人のうちの1人で、母が熙王夫人である。彼は天興6年(403)で5才、泰常7年(422)に22才で薨じ、武芸絶人、子供が7人いた¹⁷⁾という。

つぎの(2)北齐河南王孝瑜は、北齐第2代文襄帝の皇子6人のうちの1人で、母は宋氏である。天保元年(550)齐の受禅により河南王となり、中書令・司州牧を歴任し、第5代武成帝の河清2年(563)に22才で薨じている。文学も好んだが、政治的行きづまりで投水自殺を図った¹⁸⁾という。

最後の(3)隋河南王昭は、煬帝の皇子3人のうちの長子で、母は周の大司馬独孤信の7

女、独孤皇后である。彼女は河南洛陽の人とある。開皇10年(590)12才で河南王となり、同17年(597)納妃し、同21年(601)父楊広の皇太子昇任の翌年、晋王を拜し内史令となる。そして大業元年(605)楊広の皇帝即位により皇太子となるが、翌大業2年(606)病のため28才で薨じている。

強弓を能くし、謙虚で怒らず、仁慈の人材で、子供が3人いた¹⁹⁾という。

ところで、水泉石窟の摩崖残碑は、かなり磨耗していて読めない字も多い。しかし、補刻部分に記されている造寺事業の様子は盛大である。たとえば、

造□千五百龍華像□区、造三千仏堂一区、造万仏三□六区、千仏天宮一区、造十六王子行像十六区、大仏像三万□□、などとあり、周辺各地で巨大な造像事業が営まれていたことが推測される。もしこれが事実を伝えているとすれば、実にケタ外れの造仏事業である。

因みに、安陽の靈泉寺の隋開皇9年(589)銘の題記では、造窟に用功1624人、造像に900人を要し、盧舎那仏一龕、阿弥陀仏一龕、弥勒仏一龕、三十五仏三十五龕、七仏七龕、伝法法師二十四人を造立したとある。この靈泉寺は齊・隋代に名僧と謳われた靈裕法師の創始した寺であり、皇帝からの援助も莫大であったとみてよいが、その造仏事業に比べて

も、水泉石窟は見劣りしない。

また、南響堂山で新たに発見された石窟の中に、隋代改刻の“²³⁾崗山石窟之碑”がある。この碑からつぎの2点が明らかになった。

一つは、北齊天統元年(565)時の大丞相淮陰王高阿那肱により建立されたと記されている点。これは『北齊書』の彼の伝に、この年後主の即位にともない、尚書左僕射から淮陰王に封じ、尚書令に除せられたとあることに一致する。すなわち、碑文が、正史の記述を裏づけているわけである。²³⁾

二つには、当山は開窟以来、靈像が一千軀に及んでいたが、北周武帝の廃仏で破棄され、隋の建国で重修されて、旧状に戻ったと記している点。これは隋代の重修が確かに行われたことを立証しているといっていると思う。²⁴⁾

さて、上記3名の河南王のうち、一体誰が適当であろうか。(1)の北魏河南王暉の場合は、死去した年が422年であり、洛陽遷都(493年)をはるかに遡る点に問題があり、洛陽遷都より前に、洛陽で巨大な造仏事業が行われたとは考え難い。(2)の北齊河南王孝瑜の場合は、たとえば、東魏の武定4年(546)父文襄王が²⁵⁾軹都で、河南に反した司徒侯景の説得にあたり、翌々年(548)に、西魏の²⁶⁾独孤信が洛陽を占拠する事態となる。したがって、北齊にとっての河南の地はきわめて不安定で、天保元年(550)以降の北齊河南王による洛陽での巨大な造像事業などは、おそらくありえないことであろう。

しかし、(3)の隋河南王昭の場合は、母が²⁷⁾独孤信の娘で、洛陽の人とあるので、彼が洛陽の地で育った可能性があること。そして、祖父が文帝楊堅、父が煬帝で、本人がその長

子、のち皇太子という皇位継承の最も恵まれた立場にあることを考慮すると、水泉石窟の補刻部分の巨大な造仏事業も、彼において十分あり得ることである。²⁸⁾したがって、この隋元徳太子昭の、河南王時代、すなわち、開皇10年(590)から同21年(601)までの間が、洛州河南王寺の実質的な活動年代ということになろう。

5. 結 び

以上の考察により、煬帝の子、元徳太子昭が、河南王に任じていた、開皇10年(590)から同21年(601)の間が、洛州河南王寺の重修された可能性の高い時期として割り出されたわけである。したがって、逆にいえばこの河南王寺の巨大な造仏事業を通して、開皇元年(581)にはじまる隋代の²⁹⁾大がかりな修造・重修の存在の一部が、裏付けられたともいえよう。

そこで、龍門における隋代の重修についても、つぎのように考えることができる。すなわち、文帝楊堅の故像修造の発令以後、煬帝の再発令を経て、そして昭の子侑が恭帝として即位し、その薨去の年(618)に隋の滅亡に至ることを考えると、³⁰⁾開皇元年(581)から皇泰元年(618)までが、河南の洛陽石窟における隋代重修期の最大幅ということである。

さて、残された疑問の一、二をとりあげて結びとしたい。

一つは、なぜ龍門石窟に隋の紀年銘文が少ないかということである。これは、隋代の重修が巨大で、国家的になり、それ以前の個人的造仏の規模や目的と違いが生じていたためと考えたい。また、たとえ³¹⁾仏龕を改修する場

合でも、前代の北魏の銘文を、改刻せずに大切にするという、強靱な尚古精神が、生きづいてきたためともいえる。

二つには、初代文帝と二代煬帝の崇仏政策は、どこまで信頼できるか、換言すれば、彼らの修造・重修の実態をどこまで把握できる

かという点である。これは上述の水泉石窟の補刻部分などの出土資料がさらに多く発見されるならば、その信憑性が高まるに違いない。あるいは、重修時の文様の特色で割り出すことなども考えられるが、これは今後の研究に俟たなければならない問題である。

【注】

- 1) 李文生「龍門石窟関係年表」(『龍門石窟』2, 平凡社・文物出版社, 1988)
- 2) 敦煌文物研究所「敦煌莫高窟内容総録」(『敦煌莫高窟』5, 平凡社・文物出版社, 1982)。拙稿「敦煌隋代石窟の特徴」(『創大アジア研究』13, 創価大学アジア研究所, 1992)
- 3) 魏徵『隋書』35 (北京 中華書局, 1973, p.1099)
- 4) 法琳『弁正論』3 (『大正蔵』52, p.509)
- 5) 水野清一・長広敏雄『龍門石窟の研究』1941, 同朋社 1970
- 6) 魏收『魏書』9, 肅宗紀 (北京 中華書局, 1974, p.225)
- 7) 『魏書』114, 釈老志 (同上 p.3043)
- 8) 『敦煌莫高窟』1~5, 平凡社・文物出版社, 1980~84。以下、敦煌関係はすべてこれによる。蓮華をテーマとする図6は、大村著(下掲注14) 680 図で、隋開皇9年の作例である。
- 9) 『龍門石窟』(北京 文物出版社, 1980) 図34 ならびに解説。
- 10) 「修行本起経」上(『大正蔵』3, p.463) 「過去現在因果経」1(『大正蔵』3, p.625) 「仏本行集経」8(『大正蔵』3, p.687, 689) 「方广大莊嚴経」2(『大正蔵』3 p.553)
- 11) 本文ではつぎのようにある。「菩薩生已, 無人扶持, 即行四方, 面各七步, 步步举足, 出大蓮華, ……我当作仏, 即立於無人扶持, 即行七步, 足所履処, 皆生蓮華」(『大正蔵』3, p.687 樹下誕生品, p.689 從園還城品)
- 12) 本文はつぎのとおり。「若人散乱心, 乃至以一華, 供養於画像, 漸見無数佛」(『大正蔵』9, p.9) 「滿十小劫, 供養於佛, 乃至滅度, 常雨此華」(同 p.22) 「是時諸佛, 各遣侍者, 問訊积迦牟尼佛, 各齎宝華滿掬, 而告之言」(同 p.33) 「持諸妙華, 住立空中, 讚歎恭敬, 行持法者」(同 p.393)
- 13) 「普賢觀結成法華」と天台の『法華文句』(『大正蔵』34, p.128) にある。拙稿「敦煌隋代石窟の特徴」(前掲注2) で、触れている。
- 14) 大村西崖『支那美術史彫塑篇』付図 (1915, 国書刊行会, 1972) 568 図
- 15) 松原三郎『中国仏教彫刻史研究』(吉川弘文館, 1966) 図142 上
- 16) 温玉成「洛陽市偃師県水泉石窟調査」(『文物』1990-3)
- 17) 『魏書』16, 河南王曜伝 (中華書局版 p.389, 395~9)
- 18) 李百薬『北齊書』11, 河南康舒王孝瑜伝 (中華書局版 p.143~4)
- 19) 『隋書』59, 元徳太子昭伝 (中華書局版 p.1435~37)
- 20) 補刻部分は次の通りである。「洛州河南王寺造銅像三区各□金□□并佛□□□造石□窟一区中置□□佛造□千五百龍華像□区□□□□山西北大狂水南□里造三千佛堂一区□当□□東北□里造一千五百龍華像一区□□□□東北三里造万佛三□六区延□堆上千佛天宮一区□□□狂水西□水南等三里□□佛天宮一区□小水北……佛一区□□□□□里田□□中□□千五百龍華像□陸渾川長城西小水水北又一里造千佛天宮一区□□□□百□□像一区□柴造二千五百龍華像一区□造十六王子行像十

- 六区□□五泉内□大佛像三万□□一十六区一千……」(『文物』1990-3, p.77)
- 21) 楊宝順「河南安陽靈泉寺石窟及小南海石窟」(『文物』1988-4), 丁明夷「北朝佛教史的重要補正」(同)
- 22) 李裕群「南響堂石窟新發現窟檐遺迹龕像」(『文物』1992-5) 図11, 12
- 23) 『北齊書』50, 高阿那肱伝(中華書局版 p.690)
- 24) 前掲注22, 図12, p.7
- 25) 『北齊書』3, 文襄帝紀(中華書局版 p.32~36), 令狐德芬等『周書』16 独孤信伝(中華書局版 p.263~8)
- 26) 『隋書』36, 文献独孤皇后伝(中華書局版 p.1108), および前掲注17
- 27) 『隋書』5, 恭帝楊侑伝(同上 p.99~103)
- 28) 周錚「北魏薛鳳規造像碑考」(『文物』1990-8) では, 同碑に隋仁寿2年この旧像を中心に寺院を重修した旨の追刻のあることを紹介している。

【図】

- 1 孫秋生等造像記(『龍門二十品』下, 二玄社, 1959) 碑は, 発願を太和七年と刻入するが, 遷都後の太和十七年(493)の誤りであろうとされている。
- 2 古陽洞の題字と背景(『龍門石窟』1, 図157)
- 3 安善夫妻墓誌(『古都洛陽秘宝展』カタログ, 岡山市オリエント美術館1983)
- 4 古陽洞北壁Ⅲ層1龕龕楣(『龍門石窟』1, 図158)
- 5 同上書き起こし図
- 6 皇帝皇后礼仏図, 拓本は賓陽洞(『中国漢唐美術展』カタログ, 早稲田大学1974)
- 7 蓮華供花, 開皇九年造釈迦石像背拓本(大村著前掲注14, 680図)。図の最下段中央に見える。
- 8 持華供養者像, 敦煌第62窟(『敦煌莫高窟』2, 図129)
- 9 龍頭飾り龕楣, 古陽洞北壁Ⅲ層2龕, 楊大

- 眼造像龕(『龍門石窟』1, 図159)
- 10 華網飾り龕楣, 古陽洞北壁上東, 長樂王夫人尉遲氏造像龕(同上1, 図156)
- 11 維摩(文殊対問)図, 古陽洞北壁Ⅱ層3龕(同上1, 166図)
- 12 釈迦仏伝図龕楣, (前掲注9『龍門石窟』図34)
- 13 歩歩生蓮図, 東魏武定4年造釈迦玉石像背(前掲注14)
- 14 水泉石窟仏龕(『文物』1990-3, p.76, 図4, 5)

【付】

本稿は1993年9月7日, 中国洛陽迎賓館において開催された, 龍門石窟1500周年国際学術討論会における口頭発表を, 日本文でまとめたものである。

The Long-men Grottoes in the Sui Dynasty

Mitsuru Koyama

The Long-men grottoes in the Sui dynasty were rarely known except a few niches with the name of the era. Therefore, it has generally been thought that few Buddhist grottoes were made in the Sui dynasty. However, since the careful examinations of wall paintings in the Dun-huang Grottoes had been carried out, it came to be known that there were about one hundred grottoes related to the Sui dynasty era in the Dun-huang grottoes. Therefore, the surpassing policies of worshipping Buddhism promotion by Emperor Wen-di and Yang-di were verified. The following consideration focuses on the Gu-yang Cave in the Long-men Grottoes.

The Gu-yang Cave in Long-men Grottoes has plenty of niches with the inscriptions of Northern Wei dynasty era. Therefore, generally speaking, it is believed that those grottoes were chiselled in the Northern Wei dynasty. But the epigraph (Fig. 2) on the wall at the inner part on the right side of the Gu-yang Cave means the Cave of the ancient Lou-yang. Therefore, this epigraph cannot be regarded as a product in the Northern Wei dynasty. Moreover, in terms of the calligraphy style, the letters on the epigraph belong to the style of the gentle and regular script in the Sui and Tang dynasties (Fig. 3). On the other hand, the stiff style of the regular script in the Northern Wei dynasty (Fig. 1) is quite different from the former one. Therefore, we should say that the letters of the epigraph of Gu-yang Cave were inscribed in other later eras.

On the background of the letters of the epigraph of Gu-yang Cave, many figures of people and flowers are depicted (Fig. 2). For example, there are the figures of a few lotuses rising from a jar in the middle of the epigraph, and there are the images of lay believers on both sides of the lotuses. And on the upper part of the epigraph are the images of an emperor and an empress, and on the lower part are the images of maids and male servants having each lotus with three leaves or each offering. The similar images of those maids and male servants are found on the other niches in the Gu-yang Cave (Fig.4). Therefore, we can say that both figures and letters of the epigraph of Gu-yang Cave belong to the same later era.

On the second layer of the niches on the southern wall of the Gu-yang Cave are the

images of two Buddhas, i.e. Shakyamuni and Prabhutaratna sitting together. And on the upper edge of the niche on which the two Buddhas are inscribed there are the relief pictures on the biography of Shakyamuni (Fig. 12). One of those pictures shows a scene of his birth and his seven footmarks. The same picture can be found for the first time in the relics in the East Wei dynasty (Fig. 13). The description on the scene of Shakyamuni's birth can be seen in the Sui dynasty's sutras. And it is difficult to find out the figures such as flower rings (Fig. 10) or strings of beads or statues of seven or twelve Buddhas on haloes (Fig. 9) in the caves in the Northern Wei dynasty.

By examining the Shui-quan Grottoes in the northern suburbs of Lou-yang, using the information on the Shui-quan Grottoes released in 1990, I have found the niches of the Shui-quan Grottoes (Fig. 14) very similar to the ones of the Gu-yang Cave in the Long-men Grottoes. The stela left in the Shui-quan Grottoes shows "the period of ten years or so of Tai-he age (489-495 A.D.)" in Northern Wei dynasty. The Shui-quan Grottoes were made during that period. However, a long paragraph of smaller letters was added on the same stela in a later era. This paragraph reads: the King, He-nan molded three bronze statues in Lou-zhou... In the authentic historical books we can find three persons who were called the King, He-nan, that is, Yao, King of He-nan in the Northern Wei dynasty, and Xiao-yu in the Northern Ch'i dynasty, and Zhao in the Sui dynasty. The same paragraph of the smaller letters contains such descriptions as "1,500 Long-hua statues," "3,000 Buddhistic shrines," "16 sections of the 16 prince statues," "30,000 big Buddhist statues," and so forth. It is possible that these Buddhist statues were made by the King, He-nan Zhao, grandson of Emperor Wen-di i.e. the eldest son of Emperor Yang di. The period of the King, He-nan Zhao is from 590 to 601 A.D.

Consequently, I can conclude that the Gu-yang Cave was repaired after Wen-di had been enthroned. The Buddhistic books, i.e. Fa Yuan Zhu Lin and Bian Zheng Lun say that Emperor Wen-di renovated 1,508,940 old statues. This description will be able to be applied to the above mentioned renovation work of the Gu-yang Cave and the Shui-quan Grottoes.